Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2024-06-25

台湾原住民運動後の部落に生きる「現代頭目」――台湾原住民族ルカイの伝統と権威をめぐるポリティクスの民族誌

尤，驍

(Degree)
博士（学術）

(Date of Degree)
2023-03-25

(Date of Publication)
2025-03-25

(Resource Type)
doctoral thesis

(Report Number)
甲第8527号

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100482275

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。

（別紙様式 3）

論　文　要　旨

氏　名　尤　驍
専　攻　文化相関・文化人類学
指導教員氏名　岡田　浩樹

論文題目

台湾原住民運動後の部落に生きる「現代頭目」
――台湾原住民族ルカイの伝統と権威をめぐるポリティクスの民族誌

論文要旨

本論文の全体の研究目的は、現代社会に生きる台湾原住民族ルカイの伝統的な権威者である頭目、つまり「現代頭目」に基づく伝統と権威をめぐるポリティクスについて考察することにある。ルカイの部落のなかで頭目が占める地位の背後にある論理とポリティクスを明らかにしたうえで、頭目の地位を維持し再生産する諸活動と現在のルカイ社会との間の相互作用を解明する。

上記の研究目的を達成するために、本論文は、頭目の制度的な基盤の歴史的変容に十分に留意しながら、必ずしもそれを前提とせず、頭目をめぐるミクロレベルでの相互行為を、その場における具体的な人間関係とローカル・ポリティクスの中で捉えるというアプローチを採用する。頭目について、「消滅から復興へ」、あるいは「弱体化から象徴化へ」という図式だけでは回収できない現状の民族誌を描き出す。

本論文の結論として、ルカイの部落に生きる「現代頭目」の伝統と権威をめぐるポリティクスとは、「接ぎ木」（grafting）と呼ぶべき戦術を行使することである。「接ぎ木」の戦術とは、植民地化と近代化により従来の制度的な基盤を失った頭目の地位を、近代的な論理と社会組織に接ぎ合わせて、新しい論理と制度に基づいて地位を維持し再生産する文化実践である。このような文化実践を通して再構築された「現代頭目」の地位は、従来の台湾原住民研究で描いた首長の有する伝統的な権威と異なり、現在の台湾原住民部落の内部と外部にある複数の論理の相互作用に応じて再構築された権威を纏っている地位である。

このような「現代頭目」の文化実践は、近代的な社会組織と市場経済と結びついた形で、部落に新たな不平等な権力関係の形成を促し、既存の植民地的、抑圧的な権力関係を持続させる可能性を有している。一方、それと同時に、政治権力と市場経済に選別された伝統文化と異なる新たな原住民文化を生み出すことによって、脱植民地化の新たな可能性をもたらしている。この意味から、現在のルカイ社会に対して両義的、ジレンマ的な影響を与えているのである。

本論文は序章、終章、および９つの章から成り立っている。序章ではフィールドでの体験から本論文の問題意識と研究目的を提示する。第一章では、序章で提起したフィールドからの問いを先行研究に位置づけ、問題の所在を明らかにする。そのうえで本論文のアプローチを明確にする。

続いて、第二章では台湾原住民という人々の基本的な情報を提示するうえで、植民地化と権利回復運動の視点から、現在における台湾原住民社会の状況について紹介する。第三章では、本論文の研究対象であるルカイという民族集団の社会状況に目を転じ、日本による植民地統治と戦後の国民党政権の同化政策、および 1980 年代の原住民族権利回復運動という一連の社会変化のなかで、ルカイの頭目の位置づけの変化の過程を通時的に説明する。

第四章では、調査地クンガダワンの具体的な状況に焦点を当てる。ミクロな視点に従い、クンガダワンの概要と歴史を紹介したうえで、頭目家ラルグアン家の歴史と現状を提示する。第五章では、頭目家と平民層の両方の語りを取り上げ、クンガダワンの人々が抱く頭目の多様な文化像を提示する。現在のクンガダワンにおける、伝統と歴史をめぐる口頭伝承と、人びとの頭目をめぐる日常会話での語りを分析する。そのような作業を通して、従来の先行研究で取り上げられた神話伝承など、頭目の地位と権威に基づく諸観念が現在いかに認識されているのかについて考察する。

続いての第六章から第九章では、クンガダワンの頭目の逝去の前後に行われた、頭目をめぐる４つの出来事を事例として取り上げて考察する。第六章では、クンガダワンで行われた婚姻儀礼に焦点を当てる。婚姻儀礼おける頭目への表敬行為をはじめ、参加者と頭目との相互行為を描き出すことを通して、頭目が婚姻儀礼の場で果たしていた役割を明らかにする。婚姻儀礼において、頭目の伝統的な地位がいかに再生産され、頭目の権威がいかに顕在化しているかについて検討する

第七章では、クンガダワンで大きな影響力を有した頭目の逝去に際して、部落のエリートたちが彼を記念するためにかつてなかった大規模な葬儀を考案して創出し、実行した経緯を取り上げる。台湾原住民運動以降の社会状況に生きる「現代頭目」という文化像がいかに頭目の葬儀の場面で創出されて表象されるのかについて検討する。

第八章では、頭目の逝去を契機として、頭目家ラルグアン家の出身者による系譜作成を事例として考察を行う。系譜作成を通して、頭目家が自分自身の地位を主張し、権威を部落の人々に承認させるための論理とポリティクスについて分析する。

第九章では、クンガダワンの最も重要な年中行事であり、観光化された伝統祭典である黒米祭の沿革における頭目家の関わりに注目する。頭目家の人がいかに伝統祭典を通して、頭目の文化像を再び伝統文化の中心に位置づけ、頭目と部落の相互関係を再編しながら、頭目家の地位と権威を顕在化させているのかを明らかにする。

最後に、総合考察となる終章では、序章で述べた本論文の問題意識に立ち戻り、民族誌的記述から明らかになった点を総合的に考察し、現代社会に生きる台湾原住民族ルカイの頭目、いわゆる「現代頭目」の今日的な動態を描き出し、「現代頭目」に基づく伝統と権威をめぐるポリティクスを明らかにする。

【課程博士用】

論文審査の結果の要旨

氏　　名	尤　驍
論文題目	台湾原住民運動後の部落に生きる「現代頭目」——台湾原住民族ルカイの伝統と権威をめぐるポリティクスの民族誌
判　　定	合　　格　・　不 合 格
論文チェックソフトによる確　認	■　確認 □　未確認　　理由：

審査委員	区　分	職　名	氏　　名	論文審査結果について
	委員長	教授	齋藤　剛	■　確認
	委　員	教授	岡田　浩樹	■　確認
	委　員	准教授	下條　尚志	■　確認
	委　員	国立民族学博物館・教授	野林　厚志	■　確認

要　　旨

本論文は、現代台湾に生きる原住民族ルカイを対象として、ルカイの頭目をめぐる今日的動向を、頭目の伝統と権威をめぐるポリティクスという観点から追求した民族誌であり、かつ首長制や原住民族（先住民）を主題とした文化人類学的研究である。台湾原住民族は、一方では国家による支配に晒されるという歴史的経験を共有しながらも、他方では16の民族集団からなる原住民族の間では政治体制が異なるなどの多様性が見られることが顕著な特徴となっている。尤氏が調査対象としたルカイは、頭目、貴族／平民層からなる首長制によって基礎づけられてきたことで知られており、首長制を主題とした人類学的研究が積み重ねられてきている。

このような既存の研究の動向を踏まえつつ、尤氏は、1980年代以降になって原住民族の権利保護を希求する台湾原住民運動が展開している状況に留意し、原住民族運動展開以降の今日の台湾において、首長制の中核に位置する頭目と頭目家をはじめとする調査地の人々がいかにして頭目なるものを新たに生成しようとしようとしているのかを、豊富で詳細な民族誌的事例から明らかにしている。その際に尤氏が重要な課題として掲げているのは、頭目の権威の承認をめぐる論理と現地のミクロ・ポリティクスを明らかにするのと同時に、マクロなレベルでの頭目をめぐる変化の把握である。たとえば、頭目は土地の占有、階層制の存在、儀礼執行への関与、象徴財の保持などを通じて特権的ともいえる立場を「伝統的」には保持していたと考えられるが、尤氏は、植民地支配や国家の支配と管理の強化、グローバル経済の台湾地方社会への浸透、キリスト教や教育の普及を通じた頭目と競合するような社会的・文化的活動を行う者の出現などを通じて、頭目が有していた社会的・政治的影響力が掘り崩されてきていることを、長期的な社会的・歴史的動向に目配りをしながら説得的な形で明らかにしている。

さらに、既存の研究においては、ルカイの首長制を「静態的」に捉え、その変容を「消滅」という観点から捉える傾向があったことを指摘しつつ、尤氏は現地調査の結果をもとに、頭目の今日的様相を観光化や文化産業の発展、先住民運動の展開なども視野に収めながら、単純に「消滅」としては捉えられないこと、消滅と生成の込み入った様相を明らかにしている。

これらの学術的貢献に加えて、消滅と生成の二項対立的理解でも捉えきれない頭目をめぐるポリティクスを理論化するために、尤氏は、「接ぎ木」(grafting) という分析枠組みを新たに提示するに至っている。それは、学位申請者の思考の深まりを示すだけでなく、他の台湾先住民との比較研究、さらには植民地支配、近代国民国家の統治に直面した先住民研究にも寄与しうる理論提示となりうる貢献である。

以上のような特色を有する尤氏の研究は、ルカイの頭目をめぐるミクロ・ポリティクスの諸相を詳細な現地調査に基づいて明らかにするのと同時に、植民地支配期の調査報告をはじめとした歴史的史料も検討に付すことで、今日的な頭目をめぐる交渉の現場をマクロな社会的・歴史的変化に接合させながら、独自の議論を提示しようとした独創的なものである。また、以上のような問題関心と特質を持った本論文の議論は、(1)2016年9月から2020年4月の間に通算13ヶ月かけて、中国語（台湾華語）、ルカイ語トナ方言、日本語を用いて実施されたフィールドワーク（最長の現地調査は2019年5月から2020年4月に実施）に基づく詳細な民族誌的資料の提示、(2)台湾原住民族をめぐる日本、台湾、中国における植民地支配期以降の調査記録や先行研究の綿密な検討、(3)原住民族が置かれてきた社会的・歴史的状況のマクロな視点からの検討と把握、(4)頭目と関連する首長制をめぐる既存の人類学的研究の動向の検討、などをはじめとした多角的かつ堅実な研究を進めたことによって可能となっている。

提出された学位請求論文は、註、文献リスト、写真、図表なども含めて総頁数393頁、37万字に及ぶ大部な労作である。日本語の文章表現には繰り返しが見られる点など改善の余地がややあるものの、中国語、日本語、ルカイ語を用いた現地調査を通じてオリジナルなデータを収集したうえで、その成果を一貫した議論と独創性のある論文として留学生の尤氏が日本語でまとめたことは特筆に値する。また、尤氏は頭目家の系図作成を頭目家関係者から依頼されるなど、非常に良好な関係を現地の人々と長期に渡って築いている。こうした点は、尤氏の現地調査が、現地の人々との深い信頼関係によって成り立ったものであること、そして尤氏でなくては得られない貴重な一次資料の収集が可能となったことを明確に示している。

論文は序章、九つの章、終章の合計11章から成り立っている。序章ではフィールドでの体験をもとに、自分があらかじめ抱いていた現地理解や仮説の問題点を自覚するに至った経緯を提示し

たうえで、本論文の目的を提示しているほか、現地調査の概要、本論文の構成を示している。

第一章「問題の所在」においては、(1)台湾原住民族研究、(2)首長制と伝統をめぐる人類学的研究、(3)文化復興とローカル・ポリティクスをめぐる研究という三つの領野を対象として自身の研究と関わる先行研究の批判的検討を進めたうえで、本論文のアプローチを提示している。

第二章「台湾原住民、植民地化、原住民運動」では、17 世紀以降の台湾原住民社会の歴史的変化を取り扱っている。とくに学位申請者が本論の議論との関係から重視しているのは、日本による植民地支配、国民党政権下において台湾原住民社会が近代国家の政治システムと資本主義経済に組み込まれていく過程、1980 年代以降に顕在化した台湾原住民運動の展開である。

第三章「歴史的変化のなかのルカイと頭目」では、ルカイの概要を記したうえで、ルカイの社会階層制と調査地における頭目の位置づけの変容を明らかにしている。その際に、日本による植民地統治と戦後の国民党政権の同化政策などが頭目の「周縁化」をもたらしたこと、また 1980 年代の原住民族権利回復運動など社会変動の中で、頭目の「伝統文化化」が進むという新たな局面を迎えていることが、通時的な観点から明らかにされている。

第四章「クンダガワンとその頭目家」では、調査地クンガダワンの具体的な状況に焦点を当て、その概要と歴史を紹介したうえで、頭目家ラルグアン家の歴史と現状を明らかにするだけでなく、クンガダワンにおいて頭目家と競合するような影響力を有するに至った行政機関、キリスト教会、文化復興などを目的として設立された諸協会についても丁寧に記述されている。本章の内容は、クンガダワンにおける頭目をめぐるミクロ・ポリティクスの実態を、多角的かつ詳細に取り上げた第五章以降の議論の前提となるものである。

第五章「頭目の文化像の多様化」では、従来頭目の社会的優位性を主張する根拠となっていた口頭伝承が今日では頭目や頭目家によって独占されていない状況に注目し、頭目家と平民層の両方の語りにより、頭目の多様な文化像を検討している。平民層の人々が、頭目家が主張する口頭伝承に批判を提示する状況の中で、頭目家出身者も頭目の役割を再解釈している側面に着目するなど、多様な文化像が相互にどのような影響を与え合いつつ新たな解釈が生み出されているのかを丁寧に論じている。

第六章「婚姻儀礼で顕在化する頭目の役割と権威」では、「最も伝統的」とされ、頭目の伝統的役割が顕在化する婚姻儀礼に焦点を当てている。本章では、先行研究において提示された「伝統的」な婚姻儀礼の特徴を把握したうえで、学位申請者が現地で参加した(1)頭目家と系譜関係を有する者の婚姻儀礼と(2)平民家出身者の婚姻儀礼という二つの婚姻儀礼の民族誌的事例を提示することで、婚姻儀礼の新たな側面を浮かび上がらせている。特に重点を置いて描き出されているのは、婚姻儀礼への頭目家の関与の仕方、参加者と頭目との相互行為、頭目および頭目関係者が新たに提示した頭目の役割と権威などである。

第七章「『頭目の葬儀』の創出――現代社会における頭目の文化像」では、調査中の 2019 年 5 月に逝去した頭目のために実施された葬儀を主題としている。学位申請者は、葬儀の綿密な記述と詳細な分析を通じて、従来の葬儀とは異なる新たな要素が頭目家関係者などによって付加されたことを明らかにしている。注目に値するのは、逝去した頭目自身は存命中、頭目が有していた政治的・経済的な特権が失われた状況に自覚的で、従来の頭目とは異なり自らの才覚で観光業などに従事して部落における影響力を保っていたと捉えていたのに対して、この頭目の逝去後、葬儀を主導した頭目家関係者や部落のエリートは、頭目個人の生前の努力を頭目としての卓越した資質と捉え直し、頭目の権威づけに資する形で新たな解釈を葬儀で提示したことである。また、葬儀は台湾における大統領の国葬を模倣するなど近代国家の儀礼を範型として挙行されるという、それまでにはない形式を伴ったものであった。このように、2019 年に実施された葬儀は、それまで掘り崩されてきた頭目の権威を新たに回復するために、従来の葬儀とは異なる内容と形式を伴って実施されたものであることを、尤氏は明らかにしている。さらに、この儀礼においては、従来の階層制が否定されるなど形式のみならずその内容においてもそれまでの葬儀とは異なる特質が認められることも明らかにされている。

第八章「頭目家の系譜作成をめぐるポリティクス」では、頭目の逝去後、頭目家ラルグアン関係者が系譜作成に従事し、系譜作成とその披露を通じて、平民層出身者からも疑義を提示されるようになった頭目の地位と権威を新たに主張するに至った様子を詳細に明らかにしている。頭目としての地位をめぐる主張と権威を承認させようとする論理とポリティクスを検討した本章では、学位請求者が系譜作成に巻き込まれていくようになったプロセスも詳細に記されており、調査者をも巻き込んだ現地での新たな知識の生成状況が活写されている。さらにそれだけでなく、頭目家関係者が部落内の古老や口頭伝承に精通した人々への詳細な確認を通じて綿密に系譜関係を辿りつつ系図を作成している様子にも注意深い目配りがなされている。系図が今まさに創出されつつあるプロセスを詳細に明らかにしている点だけをとっても、非常に価値のある一級の民族誌的報告である。

第九章「伝統祭典『黒米祭』と頭目の再中心化」では、調査地において最も重要な年中行事であり、観光化された伝統祭典「黒米祭」を取り上げている。本章において尤氏は、頭目家関係者が自らの生得的な地位と個々人の個人的な才覚を駆使しつつ、新たに「協会」を設立することで部落内の権力関係を再編していること、原住民文化運動の展開後重要になってきている伝統文化の復興において主導権の獲得に成功していることなど、頭目をめぐる新たな動向を事例の分析を通じて明確に示している。たとえば本章では、1990 年代末から調査地において進んでいた観光化の中で平民層が主導権を握っているという趨勢の中で、頭目家関係者がいかにして現地の重要な観光イベントとなっている祭典に参入し、頭目をめぐる文化像を伝統文化の中核に据えるのに成功したのかが明らかにされているほか、頭目をめぐる新たな文化像の創出とその文化像を伝統文化の中核に位置づけた祭典の実施が、祭典のみならず、頭目家と部落の関係の再編をもたらしたことが明らかにされている。

終章「『現代頭目』と『接ぎ木』の戦術」では、頭目の伝統と権威をめぐるポリティクスの今日的な動態を「「接ぎ木」(grafting) の戦術」というオリジナルな議論に基づいて分析し、これまでの議論を総括するとともに、ルカイに限定されない射程の広がりを持った展望を示している。

質疑応答は２時間半にわたって行われ、その結果審査委員会は、以下のように評価・判断をした。本学位請求論文は、台湾の原住民族ルカイのもとでの頭目の伝統と権威をめぐるミクロ・ポリティクスの実態を、系譜作成、婚姻儀礼や葬儀、祭礼などの詳細な記述と分析から明らかにした優れた民族誌的研究であるのと同時に、ルカイのみに限定されない広がりを持った視野で首長制や先住民を主題とした優れた文化人類学的研究である。とくに頭目をめぐる系譜の提示、さらには系

譜作成のプロセス、系譜を披露した集会の様子の報告をはじめ、尤氏が提示した民族誌的事例は、今後長年に渡って参照されるに値する第一級の資料的価値があるものと審査委員一同、高く評価している。そのような資料提示を可能にした尤氏の現地調査は、多面的な動向に注意深く目配りをしつつ綿密に実施されたものであることは、学位請求論文の記述からも、また審査に際しての試問への回答からも明らかである。

また、台湾原住民族を対象とした日本、台湾、中国の先行研究を網羅的に渉猟したうえで、植民地化、近代化の影響を受けながら首長制の変容過程をマクロな視座から丁寧に明らかにしたこと、馬淵東一をはじめとした先行研究の綿密な検証を進めたこと、先行研究の意義や価値を正当に評価しつつ、先行研究の問題点を現地調査を踏まえて指摘し、先行研究とは異なる独自の視点から、ルカイの頭目をめぐる今日的様相や、新たに出現しつつある文化像を提示している点も高く評価できる。

従来のルカイの首長制研究は首長ならびに首長を中心とする貴族層による言説や行為を通して行われてきた。これに対し、頭目と競合する知識人が新たに出現していることや頭目の権威が掘り崩されている今日的状況に目配りをしながら、学位申請者は、首長と平民層の成員との関係を射程にいれた分析を行い、首長をめぐるポリティクスをより包括的な視点でとらえている点は特筆に値する。また、民族誌的事例の検証の結果、学位申請者は、「首長制」という台木（社会システム）に首長／頭目という穂木（個人）が新たに個々人の解釈や行為を通じて繋がれていく接木モデルを提出するに至っている。これは、首長制やビッグマンなどをめぐる政治人類学的議論にも寄与する可能性を秘めたものであり、学位申請者の理論的貢献であるといえる。

学位申請者の尤驍氏が提出した学位請求論文と公開審査会における質疑応答を経て、審査委員会は、尤驍氏の学位請求論文について上記のような判断と評価を下し、審査委員全員一致で「合格」という結論に達した。

なお、個人情報の保護に関連し、公表する場合は一部固有名詞について現地関係者の承諾を得たうえで仮名にすることを審査委員会は勧告した。